

## 2016年度の北大小児科年報の発刊にあたって

北海道大学大学院医学研究院

小児科学教室 教授 有賀 正

2016年度の北大小児科年報の発刊にあたり、一言ご挨拶申し上げます。北大小児科年報の発刊は2004年度から始めましたので、これが13巻目となります。そして、私の在職中最後の年報となります。次回からは、新しい北大小児科教授がこの挨拶文を書くことになると思います。ホッとしつつも少々寂しい気がします。楽しみでもあります。就任以来、私なりに北大小児科の発展に努力してきたつもりですが、年報の内容は年々量、質ともに充実してきているでしょうか？今回も批判的に読んでいただき、感想をいただけると幸いです。

北大小児科、関連病院小児科の発展に普段の診療、研究、教育の充実は無論ですが、不可欠な条件は入局者数の充実です。2004年、それに大きな影響を与えた新臨床研修医制度が始まり、初期研修医が首都圏の研修病院へ集中しました。その後の2年間は原則として入局者はなしの厳しい2年間でした。2年後には地元へ戻ってくるという楽観的観測もありましたが、予想は裏切られ、地方では後期研修医も首都圏への偏在のあおりを受けました。北大小児科も年度ごとに浮き沈みはありましたが、新制度前より入局者は少なくなったのではないのでしょうか？そして、小児科は今年度から新専門医制度が先取りして始まっております。新しい制度ができるたびに首都圏へ医師が集中するという反省は生かされるべきです。しかし、多少の配慮はあったものの勝者の論理でシステムが構築され、医師不足がより深刻化して地方の医療がますます困窮するのはと心配しております。教授就任以来、人事異動の時期が近くなると医局長とのストレス会談が重なります。一昔前には医局長の介入がほぼ不要で後期研修医同士で研修病院をくじ引きで決めた（ドラフト会議）時代がありました。そんな時代を懐かしく思います。

しかし、この様な情勢の中、北大小児科では医局長を筆頭として教室員全員が医学生への教育、研修医への小児科勧誘を頑張ってくれています。充実した関連病院を持つ北大の強みを生かし、専攻医の研修プログラムは良いものが完

成しました。道内各地を巡って初期研修医にプログラムの説明や、北大小児科の魅力を書いて回りました。折しも、医学部のカリキュラムが変わって臨床実習が4年目の後半から始まりました。臨床実習は全科を一週間ずつ回る見学的実習から始まり、次にはある程度コミットするコア診療科の実習（小児科あり、学外も）、さらにより焦点を絞った選択臨床実習と進みます。時期にもよりますが、学年の違う医学生が病棟で入り乱れることもあり、管理・指導する方も準備などで色々大変です。そこで医局長の号令の元、全グループから実習担当を出して学生実習を実のあるものにすべく話し合っ実習計画を立案しました。また、これらのことを周知すべくホームページを刷新し、学生に魅力的なものとししました。この様な努力が少しずつ実を結び、今年度は旧システムの2人を加え、プラス8人の10人が入局してくれました。来年度もそれに近い人数が見込まれており、今後も期待できそうです。私が大学を去った後、もしも入局者ラッシュとなった場合には、私が去ったからではなく、すでにその様な努力をしていたとご理解ください。その様な事態になれば良いと本当に思っております。

在職中最後の年報ということで力が入り、挨拶文が少し長くなりました。どうぞ、北大小児科、その関連病院の仲間たちの活躍を年報の中でご覧ください。